

<特集:台湾の高等教育における卒業制作・研究>

キャリア意識形成のための日本語教育の理論と実践

—台湾淡江大学の「卒業制作及び指導」授業を例に—

曾秋桂

1.はじめに

日本では「専門日本語教育学会」が1999年に設立されて、文学語学等の文科系ばかりでなく、理系工学系法学系医学系など多様な学科で学ぶ留学生向け、あるいは就職先の企業や団体に使われる日本語に関する日本語の記述と教育実践の試みが蓄積され¹、キャリア意識形成の中での日本語技能の重要性が意識されるようになった。一方、2005年度の日本語能力試験応募者数の人口比率が世界一という記録を保つ台湾における日本語教育²では、日本国内と同じように、専門学科教員(就職先企業関係者)が専門知識・技能を担当し、日本語教育担当者が言語的サポートを加えるという連携方式の取り組みは、まだ進んでいない。就職環境の異なる台湾では、日本で試みられた方法をそのまま用いて、日本と同じような有効性が期待できるかどうかを討論する余地も残されている。

現在の台湾では、応用日本語学科でアレンジした実務向けのカリキュラムのように、キャリア意識形成に注目し、日本語教育のカリキュラムに職業スキルとの接点を取り入れ、職業教育に対応している動きが見出せるようになっている。一方、総合大学でもキャリア意識形成に注目する動きが出ている。雑誌『Cheers』による卒業生評価の調査では、2012年で連続15年台湾の私立大学1位にランクされた淡江大学の日本語学科³では、学部4年生に対して「卒業制作

1 日本での専門日本語研究の現状は専門日本語教育学会 <http://www.soc.nii.ac.jp/stje/index.html> のホームページを参照。

2 堀越和男・余啓夫編集(2006)『いろは』22号財団法人交流協会日本語センターP4に拠る。

3 台湾台北に位置し、1966年に私立淡江大学に東方語学科として成立、1985年に日本語文学科と改称した。2012年現在、学部(日間3クラス、夜間3年生、4年生2クラス、1年生、2年生1クラス)、大学院(日間修士課程25名、夜間修士課程15名)、二年制在職班(1クラス60名)を有し、学生数は各学年約400名近く、全学科で約1600名を越えている。日本語能力試験N1の合格を卒業必須条件として、台湾では有数の規模を持つ大きな学科となっている。

及び指導」を必修科目として課してきた。2012年(100学年度)に至るまで、14年間実施してきたこの授業は、社会の変遷、教育政策の変化に応じた若干の変更はあっても、卒業に備えて学生のキャリア意識形成による日本語技能向上を目指すという重点目標は一貫している。

本論文では、具体的に本科目の設置からの経過を述べた上で、現時点で実施している各制作テーマ概要を紹介する。それから、キャリア意識形成上、重視されるようになってきているコンピテンシー理論でのスキルを各制作による職業スキル養成目標と対照させ、「卒業制作及び指導」で養成したスキル・能力との照合を検証する。最後に授業の受講生(在学生)と、社会に出て就職した経験のある卒業生の両方に対して行ったアンケート調査結果に基づいて、キャリア意識形成による日本語技能の実践学習としての「卒業制作及び指導」の役割を探究し、その成果、改善点を検討したい。なお、キャリア教育の社会的理論的背景は、今号の落合由治(2013)をご覧ください⁴。

2. 「卒業制作及び指導」科目と制作形式の変遷⁵

卒業生の社会的競争力を高めるために、「卒業制作及び指導」科目を設置して以来、現在2012年(100学年度)で14年になった。この14年間の実施期間中、社会的変遷、教育政策の変化に応じ、科目名、制作内容などの授業内容には、いくつかの変更が加えられてきた。まず、その変遷から見てみよう。

2.1 「卒業制作及び指導」科目の変遷

1997(86)学年度から大学4年生に卒業論文あるいはレポートを提出するように要求した。正式な授業科目は当時まだなかったが、提出された卒業論文あるいはレポートを、4年生の必修科目「日本修辞学」(2単位)の成績の20%として加算した。

4 落合由治(2013)「キャリア教育デザインから見た「卒業制作及び指導」の特徴とその展望—淡江大学日本語文学科の実践を事例として」参照。

5 本論文は、基本的に東呉大学日本語学科の主権による「技能実践学習としての「卒業制作」授業—成果とその課題—」(落合由治との共同発表2012年4月28日)発表内容を元にし、国際標準の学力を測定するコンピテンシーに力点を据え、在学中「卒業制作及び指導」を受講したことのある卒業生に対するアンケート調査結果を付け加えたものである。共同発表者の落合由治の承諾を得、授業の実践、在学生に対するアンケート調査結果を簡潔に再整理したが、重複した部分があるため、了承されたい。

表(1)年度別に見る制作形式の変化

形式 年度	論文	レポート	翻訳	映像制作	ディベート	演劇	旅行ガイド実習	雑誌編集	日本語創作
1997- (試行)	*	*							
1998-	*	*							
2005-	*	*	※						
2006-	*	*	*	※					
2007-	*	*	*	*	※	※			
2009-	*	*	*	*	*	*	※		
2010- 現在	*	*	*	*	*	*	*	※	※

(「*」:当年度選択可能を意味する。「※」:その年度に追加した形式)

さらに、1年後の1998(87)学年度から、4年生のカリキュラムに「卒業論文執筆及び指導(卒業論文寫作與指導)」(1単位)を必修科目として正式に設けて、卒業制作として主に学生が卒業論文、レポートの2つの形式から一つ選んで1年間で完成させてきた。その後、台湾における就職状況の変化とそれに伴った学生の進路選択の多様化に伴い、2005(94)学年度からは、「卒業制作及び指導(卒業專題與指導)」と科目名を改め、それまでの論文、レポートばかりではなく、翻訳、映像制作、ディベート、演劇、旅行ガイド実習、雑誌編集、日本語創作などより多くの内容を選択できるように次第に多様化して、職業スキル訓練として、より実践的な意味を強化した内容に改めてきた。現在2012(100)学年度に至るまで14年間継続して実施してきた制作形式を年度別に見ると、以上の表(1)に整理することが出来る。

表(1)に示した通り、台湾の社会状況の変遷と教育政策の変化に応じて、授業デザインには、若干の変更が加えられてきた。例えば、「旅行ガイド実習」は、台湾の「教育部」(日本の文部科学省に当たる機関)が発表した教育方針に従って近年開始し、4年生の「日語会話(四)」と連携させたものである。すなわち、「旅行ガイド実習」の制作形式を選ぶ4年生は、必ず科目内容と目標を「旅行ガイド実習」に定めた「日語会話(四)」⁶(必修2単位)のクラスを同時に受講すべき

6 4年生「日語会話(四)」のクラスを原則として受講者数20名とする。科目の主旨により、一学年12クラスを開講することになっている。

である。その他の「映像制作」、「雑誌編集」の制作形式を選ぶ4年生も、同じ教育目標を科目内容にしている特定の「日語会話(四)」(必修2単位)のクラスに同時に出席しなければならない。すなわち、以上の3つの制作形式は、「日語会話(四)」の指定クラスを合わせて履修しながら、そこで具体的指導を受けて制作するようになっている。

2.2 「卒業制作及び指導」科目の制作形式の内容

台湾の社会状況の変遷と教育政策の変化に応じて、制作形式を変えてきたが、現在の各制作内容は以下の表(2)の通りである。

表(2)「卒業制作及び指導」科目の制作形式とその内容

制作形式	制作の内容
①論文	学生の好きな分野(語学、文学、社会文化、教育、歴史、思想、経済経営、流行等)でテーマを決めて課題を設け、資料を集め、必要な調査等を行って、課題に対する答えを出し、日本語で論文にまとめる。目安として字数12000字以上。
②レポート	学生の好きな分野でテーマを決めて、資料を集め、内容を整理して、日本語でレポートにまとめる。目安として字数6000字以上。
③翻訳	学生の好きな分野(小説、学術、実用、流行、趣味等)で図書、雑誌等を決めて、その一部分について参考資料を見ながら、内容を日本語から中国語に翻訳して、冊子にまとめる。著作権に引っかからないように、常に呼びかけている。
④映像制作	「日語会話(四)」の指定クラスを合わせて履修し、学生の好きな分野でテーマを決めて、インタビューや取材をおこない、また参考資料を見ながら、内容を日本語の映像作品として編集しDVDにまとめる。
⑤ディベート	担当教員の指導の下で、ディベートの練習、練習試合をおこないながら、毎年の全国大会等に出場して、対戦をおこなう。大会は毎

	年4月末から5月はじめ。
⑥演劇	担当教員の指導の下で、シナリオを決め、グループで配役、諸掛などの各担当に分かれて演劇公演を準備し、卒業前の5月に公演を実施する。
⑦旅行ガイド実習	「日語会話(四)」の指定クラスを合わせて履修し、淡水の古蹟公園等と連携しながら、講習を受け、旅行ガイドの実習をおこなう。同時に、学生の好きな分野でテーマを決めて、資料を集め、必要な取材をおこなって、内容を日本語記事にまとめ、最後に旅行ガイドブックをまとめる。
⑧雑誌編集	「日語会話(四)」の指定クラスを合わせて履修し、学生の好きな分野でテーマを決めて、資料を集め、必要な取材をおこなって、内容を日本語記事にまとめ、最後に各グループの記事を冊子にまとめる。
⑨日本語創作	学生の好きな分野でスキル(漫画、小説、図書編集、CG等)を選び、必要な資料を見ながら、そのスキルで実作をおこない、作品を提出する。

上述の9つの制作形式を4年生の個人の進路、趣味により、自由に選べる。また、単独あるいはグループで完成するという選択肢も許される。ただし、グループ活動の一環とされた「ディベート」と「演劇」以外では、制作内容の公平な負担を考慮してグループの人数を3名から5名程度に制限する。

いずれにせよ、卒業に備えて各種制作スキルの実習により、学生の日本語技能向上を通じてキャリア意識形成を図るという重点目標は、「卒業制作及び指導」の授業では終始一貫している。

3. 「卒業制作及び指導」の執行現状

科目「卒業制作及び指導」の実施の現状を簡単に説明する。

3.1 科目担当教師と指導教官との連携方式

1 学年を 3 クラスに分けた学科では、3 名の教師が各「卒業制作及び指導」クラスを週に 1 コマ(50 分)担当する。1 学年度を、上学期(9 月-1 月、18 週)、下学期(2 月-5 月、15 週)に分けて、制作に役立つ授業内容を講義する。学生は授業外で、配分された「学科教員専門一覧表」に基づいて、各自で興味のある分野のテーマを選び、自分でテーマ案を書いて持参し、指導教官に依頼する。学生を指導する際に、指導教官は手当などは一切支給されず、ボランティアとして指導している。そのため、教師の負担を減らすために、原則としては、常勤教師が 10 名まで、非常勤教師が 3 名程度の指導になるように規定されている。一方、学生を指導する教師側の声にも耳を傾けるべく、指導を受けたい学生の研究テーマについて「指導側の要望一覧表」をも同時に学生に配るようになっている。このように、学生と教師とが十分に話し合った上で、了解できた指導関係が望ましい。指導関係を結んだ時点で、学生が指導教官に「指導承諾書」にサインをもらい、事務に報告する。その後、1 学期(上、下学期とも)少なくとも学生は指導教官に 6 回の指導を受け、「指導教官指導記録表」にサインしてもらい、下学期の最後に完成品を提出して成績を付けてもらう。基本的方向としては、科目の担当教師と、指導教官との連携により、学生の各種スキルを養成することになっている。

3.2 上学期の指導スケジュール

9 月に始まる上学期の授業は以下の表(3)ように進めている。

表(3)「卒業制作及び指導」の上学期の指導スケジュール

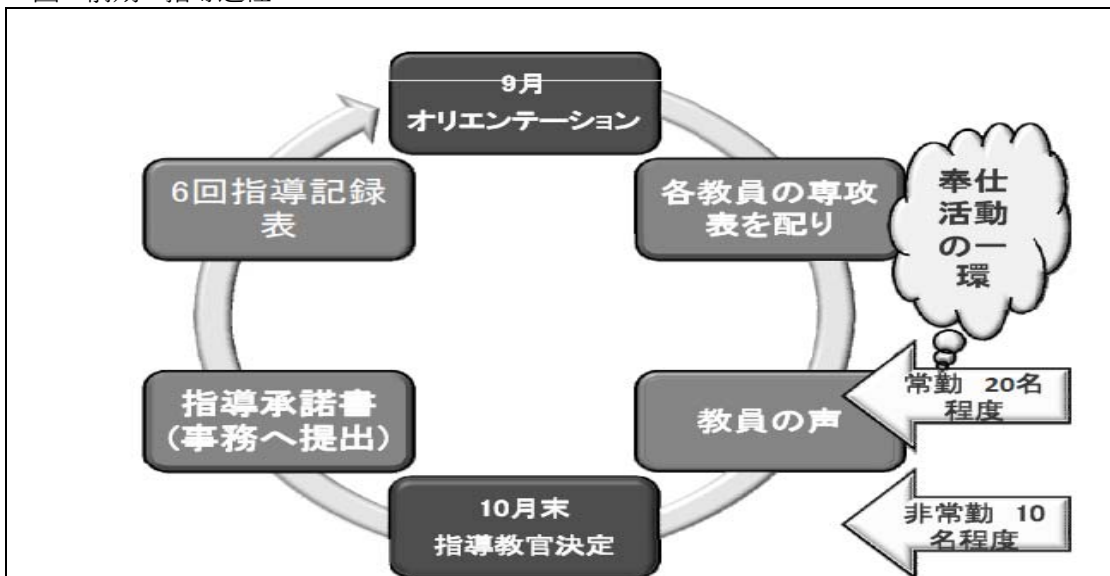
時期(18 週間)	内容	説明
前年度 6 月	3 年生向け「日語会話(四)」授業内容説明会	4 年次の「卒業制作及び指導」に合わせて、「映像制作」、「旅行ガイド実習ガイド」、「雑誌編集」の 3 種類は「日語会話(四)」で指導を実施している。

		選択希望の学生は4年次、担当教師のクラスを必ず受講する。
9月中旬	4年生「卒業制作及び指導」クラス受講開始	4年生に「学科教員専門一覧表」と「指導側の要望一覧表」を配り、4年生は1単位の「卒業制作及び指導」クラスを受講し、各制作形式と1年間のスケジュールの説明を受け、制作形式を慎重に考慮し、指導教官を誰にするかを考えてもらう。
9月下旬	「翻訳」、「ディベート」、「演劇」、「日本語創作」の4種類について、オリエンテーションの開催	当年度の担当教師が4年生に向けて、「翻訳」、「ディベート」、「演劇」、「日本語創作」の1年間の予定を説明する。
10月	4年生「卒業制作及び指導」の制作形式と指導教官決定	4年生は「指導承諾書」を持参し、指導教官と相談し、制作形式を決め、指導の許可を得る。決定後、学科に届ける。
11月～翌年1月	4年生「卒業制作及び指導」の制作計画提出	4年生が各自の「卒業制作及び指導」で、研究計画の書き方を科目担当教師から聴講する。授業の進度に合わせて制作計画を執筆し、最後に完成した制作計画を提出する。合わせて6回の宿題を課せられる。 授業を聴講する以外、各自に指導教官に少なくとも6回の個人指導を受けて、「指導教官指導記録表」に記入してもらう。記入した「指導教官指導記録表」を最後に添え、制作計画を

		<p>提出する。</p> <p>「映像制作」、「旅行ガイド実習ガイド」、「雑誌編集」は、1 学期の「日語会話(四)」でスキルの説明と練習、実習をしながら、制作計画を立てる。</p> <p>「論文」、「レポート」、「翻訳」、「日本語創作」は指導教官に個人指導を受けながら、必要な執筆の技術を学び、制作計画を立てる。</p> <p>「演劇」、「ディベート」は放課後に集まって、指導教官の指導を受けながら、公演、大会参加に向けた準備を実施する。</p>
--	--	---

なお、上学期の成績は科目担当教師が付けることになっている。

図1 前期の指導過程



3.3 下学期の指導スケジュール

2月に始まる下学期の授業を以下の表(4)ように進めている。

表(4)「卒業制作及び指導」の下学期の指導スケジュール

時期(15 週間)	内容	説明
翌年 2 月～4 月	上学期に引き続いて、4 年生「卒業制作及び指導」の内容執筆・制作実行	<p>4 年生は「卒業制作及び指導」授業で論文、レポートの章立てと書き方の指導を受けながら、5 回の宿題を出して内容の執筆を行う。</p> <p>「映像制作」、「旅行ガイド実習」、「雑誌編集」は、2 学期の「日語会話(四)」でスキルの説明と練習、実習をしながら、制作を実行する。</p> <p>「論文」、「レポート」、「翻訳」、「日本語創作」は指導教官に指導を受けながら、必要な執筆の技術を学び、制作計画を立てる。</p> <p>「演劇」、「ディベート」は放課後等に集まって、指導教官の指導を受けながら、公演、大会参加に向けた準備を実施する。</p> <p>4 月か 5 月にディベートは大会参加を実施する。</p>
翌年 5～6 月	4 年生「卒業制作及び指導」制作完成	<p>授業を聴講する以外、各自に指導教官に少なくとも 6 回の個人指導を受けて、「指導教官指導記録表」に記入してもらう。記入した「指導教官指導記録表」(成績付け)を卒業制作に添え、提出する。</p>

		<p>4年生は「卒業制作及び指導」授業のまとめとして最後に完成した卒業制作(「論文」、「レポート」、「翻訳」、「旅行ガイド実習」、「雑誌編集」、「日本語創作」の6つ)を製本して学科に提出する。「映像制作」はDVD、「演劇」、「ディベート」は活動報告を、学科に提出する。</p> <p>「演劇」は5月に劇の公演を実施する。</p> <p>「映像制作」は、6月に成果発表会を開催する。</p>
--	--	--

なお、下学期の成績は科目担当教師が指導教官と協力し付けることになっている。科目担当教師が付けた成績は40%、指導教官が付けた成績は60%という比率で、4年生の下学年の成績を出す。

図2 後期の指導過程



4.コンピテンシーを尺度として測定するスキル・能力との照合

キャリア意識による日本語技能の重要性が意識されている中、国際標準の学力を目指す OECD⁷や業績向上につながる能力開発の新指標を求めた JMAM コンピテンシー研究会⁸が策定したように、コンピテンシーの概念は職業人の能力尺度として学生が学習したスキル・能力を測定する場合に有効であると思われる。まず、コンピテンシーについて、簡単に説明する。

4.1 コンピテンシー概念の由来

コンピテンシーは、一番最初に 1959 年にハーバード大学心理学者ホワートに「環境と効果的に相互作用する有機体の能力(capability)」と定義された⁹。概念がかなり違っているが、今日のコンピテンシー研究の基礎は、同じハーバード学派としてホワートの影響を受け継いだマクレランド(1973年の外交官適性の研究)、ボイヤティス(1982年の米国海軍の監督職の研究)に求められる¹⁰という。その後、コンピテンシーについて統一された定義はなく、各応用した分野によって、様々な定義が見られる。例えば、「Compete」(競争する)を語源としたコンピテンシー(Competency)¹¹は、ビジネス経営の世界では、「特定の仕事(職務)において高い業績をあげ続けている人に固有な行動特性」¹²と定義されている。それに対して、行動心理学の世界では、「特定の職務遂行場面や課題状況において、ある基準に照らして、効果的な成果もしくは優れた成果の原因となるような、個人の潜在的特性」¹³と見られている。日本では、バブル経済崩壊

7 ドミニク・S・ライチェン／ローラ・H・サルガニク編著立出慶裕監訳／今西幸慶代表訳 (2006 初・2008) 『キーコンピテンシー』明石書店 P9 では、「経済協力開発機構(Organisation for Economic Co-operation and Development:OECD)はこれまでの国際調査に用いられた研究課題と各国の教育政策や労働政策を整理し、将来行われる国際調査に共通する能力の概念を1つにまとめる事業を提案した。「コンピテンシーの定義と選択:その理論的・概念的基礎」プロジェクト(通称 DeSeCo:デセコ)と呼ばれるこの新たな事業は、成人の能力概念を整理し、新たな定義を行おうとするプロジェクトである」とある。

8 古川久敬監修 JMAM コンピテンシー研究会編著 (2002 初・2003) 『コンピテンシーラーニング』日本能率協会ネマジメントセンターP3 では、「日本能率協会ネマジメントセンター・人事アセスメント研究所によるコンピテンシー研究会が成立したと分かった。

9 同前掲古川久敬書 P192

10 同前掲古川久敬書 P192

11 高木史朗(2004) 『コンピテンシー評価と能力開発の実務』日本コンサルタントグループ P64

12 同前掲高木史朗書 P25

13 同前掲高木史朗書 P25

後 1990 年代から、「個人の内面的な資質や潜在的特性を含めたコンピテンシー論」¹⁴が導入されてきた。そうした中、JMAM コンピテンシー研究会は、コンピテンシーを「個人が内的に保有し学習によって獲得される、職務上の高い成果や業績と直接に関連した、職務遂行能力にかかわる新しい概念」¹⁵といった定義の方向性を定めていた。

コンピテンシーを教育場面に応用すると、「知識を効果的に習得するために必要なさまざまな基礎能力を含んでおり、知性面と意欲面にまたがる能力」¹⁶に言い換えることが出来よう。また、コンピテンシーが「一般的にはカリキュラムの改革と拡張、あるいは教育目標の改善に関するいくつかの方法で取り扱われている」¹⁷という。さらに、中枢的な役割を演じてきた学校教育調査には、教育システムが効果的に、公平に機能してきたか、学業成績の主な決定要因は何か、などの評価にコンピテンシーが役立っていると¹⁸言われている。本論文は、「卒業制作及び指導」科目で学べるスキル・能力を検証する指標の一つとして、教育場面で応用されたコンピテンシーの概念を導入し、それに照合してみよう。

4.2 「卒業制作及び指導」科目で学べるスキル・能力

上述の 9 つの制作形式と内容は、「論文」、「レポート」のみで、日本の大学のかつての「卒業論文」の練習からスタートし、「翻訳」、「演劇」、「ディベート」は卒業制作とは別に希望者が実施していた。しかし、日本語力向上の意味で、書き言葉の訓練と話し言葉の訓練が選択できるように、「演劇」、「ディベート」も卒業制作の選択テーマに含めた。さらに、近年、日本語力に関する職業スキルアップだけでなく、仕事に役立つ専門スキルの実習を兼ねて、「映像制作」、「雑誌編集」、「旅行ガイド実習」、「日本語創作」が加わり、学生の自主性と個性を尊重するために自分の得意なスキルを活かした創作形式も増やした。書き言葉中心か話し言葉中心かあるいは実習中心かで重点の変化はあるものの、「卒業制作及び指導」科目と真剣に取り組んだ学生は、以下の表(5)に整理したスキル・能力の訓練を受けたと考えられる。

14 同前掲高木史朗書 P26

15 同前掲古川久敬書 P193

16 同前掲古川久敬書 P194

17 同前掲ドミニク・S・ライチェン／ローラ・H・サルガニク編著立出慶裕監訳／今西幸慶代表訳書 P40

18 同前掲ドミニク・S・ライチェン／ローラ・H・サルガニク編著立出慶裕監訳／今西幸慶代表訳書 P176

表(5)「卒業制作及び指導」科目で学べるスキル・能力

- ① 文書作成、編集、構成、校正
- ② パソコンスキル、インターネットスキル
- ③ 情報収集と整理分類能力
- ④ スケジュール管理、情報管理
- ⑤ 対人(教官、チーム内、対外関係)コミュニケーション能力
- ⑥ 思考力、分析力、集中力、判断力
- ⑦ 日本語(さらに英語)と中国語の読解力、文章力、作文力、要約力
専門スキル(調査研究、翻訳技能、映像音声録画編集、版面構成、ガイド、討論、パフォーマンス)

「卒業制作及び指導」を設置した当初は、単純に卒業生の社会的競争力を高めることなら、試みてみるべきだという模索状態でスタートしたもので、今日では欧米や日本などで広く普及するようになったキャリア教育を意識していたわけではない。しかし、ここ 14 年間継続し発展している中で、次第に本科目の意義や方向性が明確になってきた。

4.3 「卒業制作及び指導」実施と Tuning Project コンピテンシーとの照合

2012(100)学年度の「卒業制作及び指導」のカリキュラム設計は、現在、高等教育では必要不可欠なカリキュラムになりつつあるキャリア教育の視点から見ると、コンピテンシーの総合的訓練であり、EC で現在学力観として検討されている Tuning Project の 3 つの基本能力¹⁹で見れば、以下のような訓練を実施していると言えよう。

19 松下佳代(2007)「コンピテンシ概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点-Tuning Project の批判的検討-」『京都大学高等教育研究』13 P101-120 参照。

表(6)「卒業制作及び指導」実施と Tuning Project コンピテンシーとの関係²⁰

分野	道具的コンピテンシー	対人的コンピテンシー	システムのコンピテンシー
能力項目	<ul style="list-style-type: none"> ○分析と総合の能力 ○組織化とプランニング能力 ○基礎的な一般知識 △職業の基礎知識の習得 ○母語の話し言葉・書き言葉によるコミュニケーション能力 ○第二言語の知識(日本語、英語) ○基礎的な計算技能(図表と統計処理) ○情報処理スキル ○問題解決 ○意思決定 	<ul style="list-style-type: none"> △批判的・自己批判能力 ○チームワーク(映像、雑誌、ガイド、劇、ディベート) ○対人スキル ×学際的なチームで働く能力 △他分野の専門家とコミュニケーションする能力 △多様性と多文化性を認めること △国際的な場面で働く能力 ○倫理的な関わり(責任感、スケジュール管理、困難克服) 	<ul style="list-style-type: none"> ○知識を実践に適用する能力 ○リサーチのスキル ○学習する能力 ○新しい状況に適応する能力 ○新しいアイデアを生み出す能力 ○リーダーシップ(映像、雑誌、ガイド、劇、ディベート) ○他国の文化と習慣の理解 ○自律的に働く能力 ○プロジェクトのデザインと運営 △イニシアティブと企業家精神 ○質への関心 ○成功しようとする意思

注:○該当する、△やや該当する、×該当しない/()内は補足説明

以上、カリキュラム設計としては、社会人として基本的に求められる各種のコンピテンシーの訓練として、必要な能力項目をほぼ網羅する形で各種の形式が設定されており、大学の日本語文学科におけるキャリア教育の一環として十分に機能し得るデザインになっていると言える

20 同上松下佳代の文献 P104 に掲げた表 1 の内容を利用し、卒業制作で訓練できると思われる項目をそれぞれ評価した。

う。では、実際の効果はどうであろうか。ここでは受講生に対する意識調査を以って、効果の検証に代えることにする。

5. アンケート調査で明白になった受講生の反応

2010(99)学年度の学生に対して、第2学期の終わり2011年5月中旬の最後の授業で、一年間の授業に対するアンケート調査をおこなった。都合上、「卒業制作及び指導」科目のAクラス、Bクラスの133名の受講者を対象に、授業に対する意識を調査した。アンケートの内容は以下の通りである。なお、調査票の原文は中国語であるが、日本語に直して示す。

表(7)授業に対する意識調査の内容

大項目	質問項目
基本資料	<p><回答方式>当てはまる項目を一つ選択</p> <p>性別:男女</p> <p>所属クラス:A B C その他</p> <p>選択した制作形式:論文 レポート 翻訳 日本語創作 旅行ガイド実習 映像制作 ディベート 演劇 雑誌編集 その他</p> <p>選択した理由(自由記述式)</p> <p>制作の方法:個人で完成 グループで完成 その他</p> <p>方法を選んだ理由(自由記述式)</p>
意識調査	<p><回答方式>非常に賛成から非常に反対まで5段階で一つを当てはまる選択肢を一つ選択</p> <p>この科目がもし必修でなければ選択しなかった。</p> <p>この科目を履修して大きなストレスを受けた。</p> <p>現在、制作の形式を選び間違っていると後悔している。</p> <p>現在、制作の方法を選び間違っていると後悔している。</p> <p>制作の形式を変更したことがある。</p> <p>指導教官を変更したことがある。</p>

	<p>「卒業制作及び指導」科目のクラスを変更したことがある。</p> <p>制作過程に適応して楽しく制作ができた。</p> <p>制作過程に適応した後も、制作内容に苦勞し、制作に非常に苦しんだ。</p> <p>制作を完成して達成感がある。</p> <p>制作を完成して今後の人生(就職や進学)に自信ができた。</p> <p>この科目は選択科目にしたほうがよい。</p> <p>この科目は必修科目のままにして、淡江大学日文系の特色にしたほうがよい。</p> <p>この科目の関係で指導教官との関係がよくなった。</p> <p>この科目の関係で年上の人と話すのが怖くなくなった。</p> <p>この科目の関係で同級生との関係がよくなった。</p> <p>この科目の関係で同級生との関係が悪くなった。</p> <p>この科目の関係で潜在能力が発揮でき、自分の才能を改めて認識した。</p> <p>この科目に全力を尽くした。</p> <p>この科目での成果に満足している。</p> <p>社会に出る前にこの科目で試練を受けることが出来て感激している。</p> <p>この科目を修了して、全台湾の日本語関係学科卒業生に対してプライドが持てる。</p> <p>後輩達にもこの科目の履修を推薦する。</p> <p>社会に対して淡江日文系にこの科目があることを自慢したい。</p>
<p>授業を受けた感想</p>	<p><回答方式>自由記述式</p> <p>後輩達への言葉</p> <p>科目担当教師への言葉</p> <p>指導教官への言葉</p> <p>自分自身への言葉</p>

(注)意識調査項目は25項目設けたが、回答欄の不備で1項目の回答が抜けたケースが多かった。この項目は除いた24項目の集計結果を報告する。

基本資料では、学生の属性と選んだ作成形式を尋ね、意識調査では、必修の是非、ストレスの大きさ、制作と授業への満足度と試練度、訓練としての適切度と効果の大きさ、対人関係への影響、授業への誇りなどの24の質問項目に5段階評価で答えてもらった。また、授業を受けた感想は自由記述式で記入してもらった。以下では、アンケートの集計結果のうち、基本資料と意識調査の部分を取り上げて報告する。

5.1 受講生のアンケート結果の分析

アンケートを集計した結果は以下の通りである。なお以下の表(8)では、実数が項目合計、()内の数値は%である。

表(8) 基本項目集計結果

質問項目	集計結果
性別	男:34(25.5) 女:99(74.5) 合計 133(100)
所属クラス	A:65(48.9) B:56(42.1) C:7(5.3) その他 5(3.7)*1
選択した制作形式	論文 53(39.8) 翻訳 41(30.7) 演劇 10(7.5) 雑誌編集 7(5.3) 旅行ガイド実習 5(3.8) レポート 3(2.3) 映像制作 3(2.3) ディベート 3(2.3) 日本語創作 2(1.5) その他(複数選択 6(4.5))*2
制作の方法	個人で完成 96(72.2) グループで完成 34(25.5) その他(複数選択 3(2.3))*3

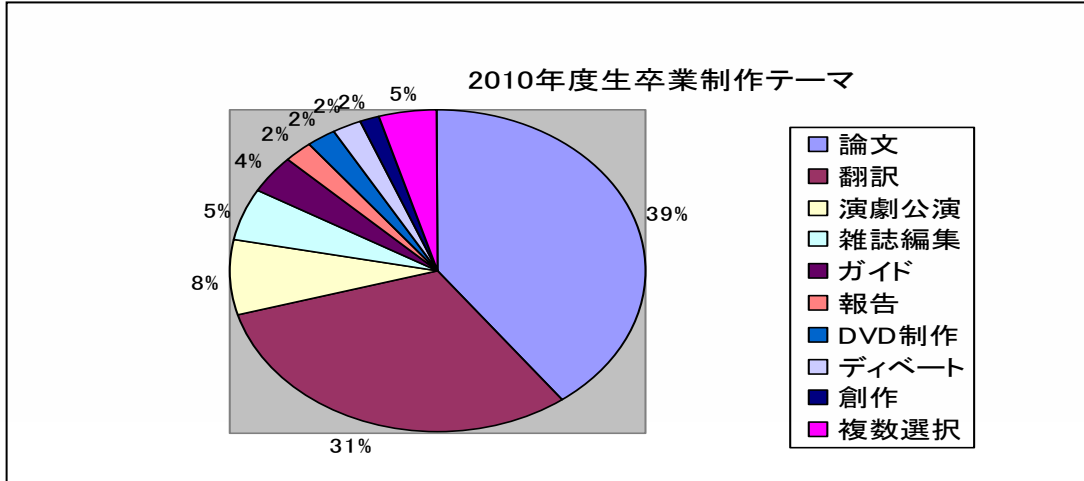
*1 その他は他学科と日本語学科とのダブルメジャー

*2 論文・翻訳 2 論文・雑誌編集 2 ガイド・DVD制作 1 ディベート・演劇 1

*3 個人とグループ両方

2010(99)学年度の学生が選択したテーマは、以下の円グラフのようになった。

グラフ1 制作テーマの選択状況



個人制作でできる書き言葉の練習を中心にした論文、翻訳、日本語創作、レポートを選んだ学生が全体の 74.8%を占め、残りの学生はグループ活動で行い、インタビューや実習での話し言葉と、編集での書き言葉を共に使う課題と言える雑誌編集、旅行ガイド実習、映像制作か、話し言葉中心の演劇、ディベートのテーマを選んでいる。また、制作の方法を尋ねたところ、単独的に完成が 72.2%、グループで完成が 25.5%、複数選択が 2.3%であった。このうち、単独的に完成の比率と論文、翻訳、日本語創作、レポートを選んだ学生の比率はほぼ同じで、論文、翻訳、日本語創作、レポートを選んだ学生は、基本的に単独的制作で行い、それ以外の制作形式はグループ制作になり、選択した制作形式によって分かれたことが分かる。

制作形式を選んだ理由について自由記述で書いてもらったところ、回答があった 75 名の 78 回答について、以下の表(9)のように、大きくは 5 種類に分けられる動機が見られる。

表(9) 制作形式選択と方法選択の理由

制作を選択した理由(自由記述式、複数回答可)	<p><分野への自分の興味関心>30(38.5)</p> <p>その分野に興味を持っている 19</p> <p>自分の作品を持ちたい、思い出にしたい 5</p> <p>面白そう 6</p>
------------------------	--

	<p>＜今後の進路準備＞18(23.0)</p> <p>進学、就職の準備 15</p> <p>スキルの経験を積みたい 3</p> <p>＜有意義性＞16(20.5)</p> <p>自分への挑戦、試練、達成感がある 7</p> <p>自分の実力を伸ばしたい 4</p> <p>苦手だから 2</p> <p>知識を増やしたい 1</p> <p>大学生として有意義 1</p> <p>多くの人に台湾を知ってほしい 1</p> <p>＜活動の性質＞8(10.3)</p> <p>個人で出来るものを選びたい 5</p> <p>グループ活動が好きだから 3</p> <p>＜外的理由＞6(7.7)</p> <p>先生の勧め 4</p> <p>簡単に出来そうだから 1</p> <p>必修だから 1</p>
<p>方法を選択した理由(自由記述式)</p>	<p>＜個人活動の積極的選択＞32(50)</p> <p>一人の方が内容、進度を調整しやすい 9</p> <p>自分だけの作品を残したい、達成感がある 7</p> <p>自己鍛錬、独立心を養う 5</p> <p>自分への挑戦 4</p> <p>一人の方が考えやすい 4</p> <p>個人で作業しても、先生や同級生に相談している 3</p> <p>＜集団活動の積極的選択＞19(29.7)</p> <p>演劇などはグループしか出来ない、大学</p>

	<p>の規定 7</p> <p>人が多い方が早く完成できる、チームの方が複雑な作業ができる 3</p> <p>チームの活動が好き、チームワークを体験したい 3</p> <p>人数が多いといろいろな見方が出来る 2</p> <p>いい友人でグループになった 2</p> <p>単独的に制作してグループで編集した 1</p> <p>感じがいい 1</p> <p><トラブル回避>13(20.3)</p> <p>グループは時間の制約がある、個人はスケジュールが自由 6</p> <p>人が多いと喧嘩になりやすい、迷惑を掛けたくない 3</p> <p>その方が便利だから 2</p> <p>グループでするのは面倒が多い 1</p> <p>個人のほうが作品の所有権の問題がない 1</p>
--	--

制作を選んだ動機は、78 回答中「分野への自分の興味関心」38.5%、「今後の進路準備」23.0%、実行することに価値があるとする「有意義性」20.5%が多く、その他その活動の性質が好きだという「活動の性質」で選択した場合が 10.3%であった。一方、先生の勧めでなどという消極的選択は 7.7%で、全体の約半数を超える 70 名前後の学生がかなり積極的主体的に制作形式を選ぼうとしていたことが窺える。また、制作方法の選択では、64 名の 64 回答は、個人の活動に積極的意義を認める「個人活動の積極的選択」が 50%、グループ活動に有意義さを認める「集団活動の積極的選択」が 29.7%で、人とのトラブルを避けたいなどの「トラブル回避」を選んだものは 20.3%で、全体の約 8 割、約 50 名の学生が活動の方式にも積極的な意味があると認めている。

表(10) 意識調査集計結果

質問項目	回答度数集計結果(上段:度数/下段:%)					全体平均	標準偏差
	5 最肯定	4 やや肯定	3 普通	2 やや否定	1 最否定		
1. この科目がもし必修でなければ選択しなかった。	4 3.0	24 18.0	42 31.7	41 30.8	22 16.5	2.60	1.058
2. この科目を履修して大きなストレスを受けた。	16 12.0	29 21.8	46 34.6	23 17.3	19 14.3	3.00	1.206
3. 現在、制作の形式を選び間違っていると後悔している。	1 0.7	7 5.3	30 22.6	54 40.6	41 30.8	2.05	0.903
4. 現在、制作の方法を選び間違っていると後悔している。	0 0	6 4.5	28 21.1	55 41.4	44 33.0	1.97	0.852
5. 制作の形式を変更したことがある。	6 4.5	24 18.0	16 12.1	29 21.8	58 43.6	2.18	1.290
6. 指導教官を変更したことがある。	0 0	2 1.5	2 1.5	21 15.8	108 81.2	1.23	0.548
7. 「卒業制作及び指導」科目のクラスを変更したことがある。	0 0	0 0	2 1.5	22 16.7	108 81.8	1.20	0.436
8. 制作過程に適応して楽しく制作ができた。	14 10.5	46 34.6	50 37.6	20 15.0	3 2.3	3.36	0.940
9. 制作過程に適応した後も、制作内容に苦勞し、制作に非常に苦しんだ。	12 9.0	24 18.0	46 34.6	39 29.3	12 9.0	2.89	1.091
10. 制作を完成して達成感がある。	65 48.9	45 33.8	22 16.5	1 0.8	0 0	4.31	0.770
11. 制作を完成して今後の人生(就職や進学)に自信ができた。	34 25.8	50 37.8	43 32.6	4 3.0	1 0.8	3.85	0.869
12. この科目は選択科目にしたほうがよい。	9 6.8	17 12.8	41 30.8	39 29.3	27 20.3	2.56	1.150
13. この科目は必修科目のままにして、淡江大学日文系の特色にしたほうがよい。	47 35.3	34 25.5	44 33.1	5 3.8	3 2.3	3.88	1.015
14. この科目の関係で指導教官との関係がよくなった。	32 24.2	38 28.8	54 40.9	5 3.8	3 2.3	3.69	0.958
15. この科目の関係で年上の人と話すのが怖くなくなった。	19 14.3	38 28.6	65 48.8	8 6.0	3 2.3	3.47	0.892
16. この科目の関係で同級生との関係がよくなった。	24 18.1	46 34.6	41 30.8	20 15.0	2 1.5	3.53	1.004
17. この科目の関係で同級生との関係が悪くなった。	0 0	1 0.8	12 9.1	49 37.1	70 53.0	1.58	0.689
18. この科目の関係で潜在能力が発揮でき、自分の才能を改めて認識した。	14 10.6	42 31.8	64 48.5	12 9.1	0 0	3.44	0.803
19. この科目に全力を尽くした。	32 24.2	59 44.7	37 28.0	3 2.3	1 0.8	3.89	0.822
20. この科目での成果に満足している。	14 10.6	54 40.9	55 41.7	7 5.3	2 1.5	3.54	0.814
21. 社会に出る前にこの科目で試練を受けることが出来て感激している。	41 31.3	61 45.6	27 20.7	2 1.5	0 0	4.08	0.761
22. この科目を修了して、全台湾の日本語関係学科卒業生に	18 13.6	33 25.0	50 37.9	27 20.5	4 3.0	3.26	1.031

対してプライドが持てる。							
23. 後輩達にもこの科目の履修を推薦する。	42	43	43	4	0	3.93	0.875
	31.8	32.6	32.6	3.0	0		
24. 社会に対して淡江日文系にこの科目があることを自慢したい。	46	41	39	4	2	3.95	0.952
	34.8	31.1	29.6	3.0	1.5		

「卒業制作及び指導」に関する2010(99)学年の受講生の意識調査結果であるが、以上の結果から、授業に対する受講生の評価を以下の3点に整理しておきたい。

(1)必修の是非:質問1では必修が妥当かどうかを聞いたが、選択科目だったら選択したくない学生は全体の133人中の21%で、必修でなくても選択すると答えた学生が47.3%となり、質問12の分布結果と一致していて、半数近くの学生が必修であることに大きな意味があるとしている。質問13の学科の特色にするかどうか全体の60.8%が肯定しており、必修科目として評価されている。

(2)科目へのストレス:質問2~7、9、17は、制作過程でのストレスや困難を訊ねた。ストレスになったかどうかを聞いた質問2は平均3(中央値)、標準偏差1.2、質問9では平均約2.9、標準偏差1.1ではほぼ正規分布に近い分布になり、ストレスが大きいグループ、平均的グループ、少ないグループにはほぼ均等に分かれた。しかし、ストレスを反映する制作過程での形式の誤り、形式変更や指導教官等の変更に関する質問3~7で、形式選択を誤ったと思った学生は10%以下、形式や教官等を変更したと答えた学生はほぼ20%以下で、形式決定後は一定した制作を継続していた様子が窺える。

(3)制作への満足度と成果への評価:制作の満足度と制作結果への評価を聞いた質問8、10、11、14~24では、どの項目も平均値3以上の回答で、満足度、達成感、成果ともに学生達が肯定的評価をしている。特に平均で質問10の達成感は4.3、質問21社会へ出る前の試練の克服4.1、質問23後輩への推薦3.9、質問24自慢3.9などと、学生の満足度は高く、また試練に意義があり、学科で受け継ぐほうがよいと考えているのが窺える。学内での人間関係でも、教官、同級生ともによくなったと答えている学生が過半数を占めている。なお、自分の制作の完成度への評価であるが、質問18能力発揮、質問20成果、質問22他大学との比較を見ると、満足度に比べて3.4~3.2と低めの評価であり、学生は制作過程で自分の能力の不足を感じ、また課題にした形式では今より高い完成度と能力が求められると痛感した様子も窺える。

以上から、1年間の制作過程を通じて、学生達が障害の克服という形で制作課題を捉え、また、それを乗り越えたことに大きな満足を感じると同時に、制作過程で自分に欠けているスキルや能力を自覚していった様子が推測できた。

6. アンケート調査で判明した卒業生の声

視点を、在学中「卒業制作及び指導」を受講したことのある卒業生に変えよう。「卒業制作及び指導」を実施してきた実社会での効果はどうであろうかを、卒業生に対する意識調査を以って、効果の検証に代えることにする。

6.1 卒業生に対するアンケート調査の実施

現時点まで本学科では「卒業制作及び指導」を14年間実施してきたが、卒業生に対して効果等の調査を行ったことは一度もなかった。今回初めて連絡のつく卒業生に対して、「卒業制作及び指導」科目の効果についてのアンケート調査を実施することにした。卒業生の場合、連絡が取れない場合や本人が様々な事情でこうしたアンケート調査に応じたくない場合も多いため、卒業年度等により調査対象や数を決めることは極めて難しい。そこで、あくまでも卒業生の「卒業制作及び指導」科目に対する参考意見を聞くという性格のものではあるが、2012年2月から3月にかけて論者と連絡が取れる卒業生を対象にアンケート調査を実施した。中には卒業生が相互に連絡して、連絡のできる同窓生に調査を依頼して、返送してくれた場合もあり、全部で114名の回答が集まった。数量的には、今までの授業の効果に対する意識を調べるには十分なデータ量があると言える。アンケートの内容は以下の通りである。なお、調査票の原文は中国語であるが、日本語に直して示す。

表(11) 授業に対する意識調査の内容

大項目	質問項目
基本資料	<p>〈回答方式〉当てはまる項目を一つ選択</p> <p>性別:男女</p> <p>卒業年度:(自由記述式)日間部 夜間部</p> <p>現在の仕事(正社員、非正規雇用ともに)</p> <p>就業中</p> <p>仕事の性質 日系企業業務 台湾企業業務 会社の専門的 通訳・翻訳 出版社 在宅翻訳業務 ホテル・観光業 企業経営者 外交官 教員 就職活動中 兵役中 その他</p> <p>大学院在学中 国内 国外</p> <p>制作した作品:論文 レポート 翻訳 日本語創作 旅行ガイド実 習 映像制作 ディベート 演劇 雑誌編集 その他</p> <p>5.制作の方法:個人で完成 グループで完成 その他</p>
意識調査	<p>〈回答方式〉非常に賛成から非常に反対まで5段階で一つを当て はまる選択肢を一つ選択</p> <p>この科目は卒業後の方向を決めるのに役だった。</p> <p>この科目のおかげで面接が順調にいった。</p> <p>この科目で編集や整理の概念が身に付いた。</p> <p>この科目は自分に自信を与えてくれた。</p> <p>在学中こうした作品を完成する能力があったことは、今でも誇りにし ている。</p> <p>今でもこの作品を見ると、自分を誇りに思う。</p> <p>この科目の訓練を受けたことは、自分の今の仕事や進学に有益で あった。</p> <p>社会に出る前にこうした試練を受けたことは幸運であった。</p> <p>この科目は卒業生が卒業後の進路を探すときに、有益であると感じ ている。</p>

	<p>この科目の作品は、就職前の技能訓練の成果だと思う。</p> <p>この科目は廃止すべきである。</p> <p>理由(自由記述式)</p> <p>この科目は選択科目にしたほうがよい。</p> <p>理由(自由記述式)</p> <p>この科目は必修科目のままにして、淡江大学日文系の特色にしたほうがよい。</p> <p>理由(自由記述式)</p> <p>後輩達にもこの科目の履修を推薦する。</p> <p>社会に対して淡江日文系にこの科目があることを自慢したい。</p>
<p>言いたいことがあれば自由に書いてください</p>	<p><回答方式>自由記述式</p> <p>後輩達への言葉</p> <p>学科の先生への言葉</p> <p>学科主任への言葉</p> <p>大学への言葉</p>

基本資料では、学生の卒業年度と現在の仕事や進学の様子および選んだ制作形式を尋ね、意識調査では、現在の仕事に有益か、進路の決定に役立ったか、就職前の訓練としての適切度と効果の大きさ、制作品への誇り、必修がいいか選択がいいかなどの15の質問項目に5段階評価で答えてもらった。また、現在、大学や学科に言いたいことを自由記述式で記入してもらった。以下では、アンケートの集計結果のうち、基本資料と意識調査の部分を取り上げて報告する。

6.2 卒業生のアンケート調査結果の分析

アンケートを集計した結果は以下の通りである。なお以下の表(12)では、実数が項目合計、()内の数値は%である。

表(12) 基本項目集計結果

質問項目	集計結果
性別	男:26(22.8) 女:88(77.2) 合計 114(100)
卒業年度	学年度 *185:1 86:1 87:1 89:3 90:6 91:2 92:3 93:9 94:10 95:2 96:17 97:20 98:11 99:7 100:15 不明 6 日間部 111(97.4) 夜間部 2(1.8) 不明 1(0.8)
現在の仕事	就業中 89(78.1)(*は兼職) 日系企業業務 14 台湾企業業務 14 会社の専門的通訳・ 翻訳 9 出版社 3 在宅翻訳業務 4/*1 ホテル・観光業 3 企業経営者 0 外交官 0 教員 14 就職活動中 5 兵役中 0 その他 21(ホームページ設計 1/運輸業 1/卒業延期 1/科学 技術 1/自動車サービス 1/サービス 2/公務員 1/準備国家 試験 1/アシスタント 1/日系銀行員 1/日系販売員 1/美術 デザイン 1/保険業 1/会計 1/国外輸入 1/広告メディア 1 /獣医アシスタント 1/不明 3/不明 1*/ホームページ設計 1* /研究員 1*) 不明 2 大学院在学中 25(21.9) 国内 11 国外 8 不明 6
選択した制作形式	論文 97(85.1) レポート 2(1.8) 翻訳 5(4.4) 日本語創作 0 旅行ガイド実習 0 映像制作 0 ディベート 2(1.8) 演劇 2(1.8) 雑誌編集 1(0.8) その他(複数 選択 4(3.5))*2 不明 1(0.8)
制作の方法	個人で完成 100(87.7) グループで完成 5(4.4) その他(複数選択 1(0.8))*3 不明 8(7.0)

*1 85 学年度にはこの科目がまだ出来ていないため、多分、86 年度の誤りかと判断する。

*2 複数選択者は論文・レポート 1、論文・DVD 制作 1、翻訳・雑誌編集 2

*3 個人とグループ両方

回答してくれた卒業生は 85(1996)年卒業から 100(2011)学年卒業までの学生 114 名であり、ほとんどは日間部卒業である。また、就業中が 89 名(78.1%)、進学中が 25 名(21.9%)であった。就業中の卒業生は、日系企業業務 14 名、台湾企業業務 14 名、教員 14 名、会社の専門的通訳・翻訳 9 名などを中心に主に民間のサービス、ビジネス関係で仕事をしている。選択したテーマは、論文が 97 名(85.1%)、個人で完成が 100 名(87.7%)で、ほとんどの回答者が論文を選択し、個人で制作を行っていた。

次に、「卒業制作と指導」科目に対する意識調査の結果を表(13)に示す。

表(13) 意識調査集計結果

質問項目	回答度数集計結果(上段:度数/下段:%)					全体平均	標準偏差
	5 最肯定	4 やや肯定	3 普通	2 やや否定	1 最否定		
1. この科目は卒業後の方向を決めるのに役立った。	28 24.6	43 37.7	38 33.3	4 3.5	1 0.9	3.82	0.878
2. この科目のおかげで面接が順調にいった。	29 25.4	51 44.7	29 25.4	4 3.6	1 0.9	3.90	0.852
3. この科目で編集や整理の概念が身に付いた。	52 45.6	47 41.2	14 12.3	0 0	1 0.9	4.31	0.754
4. この科目は自分に自信を与えてくれた。	39 34.2	51 44.7	22 19.3	1 0.9	1 0.9	4.11	0.802
5. 在学中こうした作品を完成する能力があったことは、今でも誇りにしている。	50 44.2	42 37.2	17 15.0	3 2.7	1 0.9	4.21	0.860
6. 今でもこの作品を見ると、自分を誇りに思う。	44 38.6	38 33.3	27 23.7	2 1.8	3 2.6	4.04	0.967
7. この科目の訓練を受けたことは、自分の今の仕事や進学に有益であった。	43 37.7	41 36.0	25 21.9	4 3.5	1 0.9	4.06	0.905
8. 社会に出る前にこうした試練を受けたことは幸運であった。	58 50.8	46 40.4	9 7.9	0 0	1 0.9	4.40	0.713
9. この科目は卒業生が卒業後の進路を探すときに、有益であると感じている。	35 30.6	45 39.5	31 27.2	1 0.9	2 1.8	3.96	0.881
10. この科目の作品は、就職前の技能訓練の成果だと思う。	30 26.5	44 38.9	33 29.3	5 4.4	1 0.9	3.86	0.895
11. この科目は廃止すべきである。	1 0.9	0 0	3 2.7	35 31.0	74 65.4	1.40	0.634
12. この科目は選択科目にしたほうがよい。	1 0.9	8 7.3	19 17.2	41 37.3	41 37.3	1.97	0.962
13. この科目は必修科目のままにして、淡江大学日文系の特色にしたほうがよい。	66 58.4	33 29.2	9 8.0	5 4.4	0 0	4.42	0.821
14. 後輩達にもこの科目の履修を推薦する。	74 64.9	34 29.8	6 5.3	0 0	0 0	4.60	0.590

15. 社会に対して淡江日文中系にこの科目があることを自慢したい。	70	36	7	0	1	4.53	0.694
	61.4	31.6	6.1	0	0.9		

以上の結果から、授業に対する卒業生の評価を以下の3点に整理しておきたい。

(1)進路選択での有用性:質問1、2、9、10では、「卒業制作及び指導」科目が進路選択の場合に有益だったかどうかを聞いたが、卒業後の進路決定に役立ったと答えた学生は62.3%、面接が順調に行くと回答した学生70.1%、進路選択に有益だったと回答した学生も70.1%、技能訓練になったと考えている学生も65.4%あり、ほぼ60%以上の学生が進路選択と職業スキル訓練上、「卒業制作及び指導」科目の内容が役に立ったと回答している。

(2)制作への満足度と成果への評価:制作の満足度と制作結果への評価を聞いた質問3～8では、どの項目も平均値4以上の回答で、満足度、達成感、成果ともに学生達が肯定的評価をしている。特に質問3の編集能力4.31、質問5の作品への誇り4.21、質問8の社会に出る前の試練への評価は4.4などと、全体の80～90%の回答者が高い満足度を示し、また、試練を受けたことに意義があり、身に付いたスキルを評価しているのが窺える。

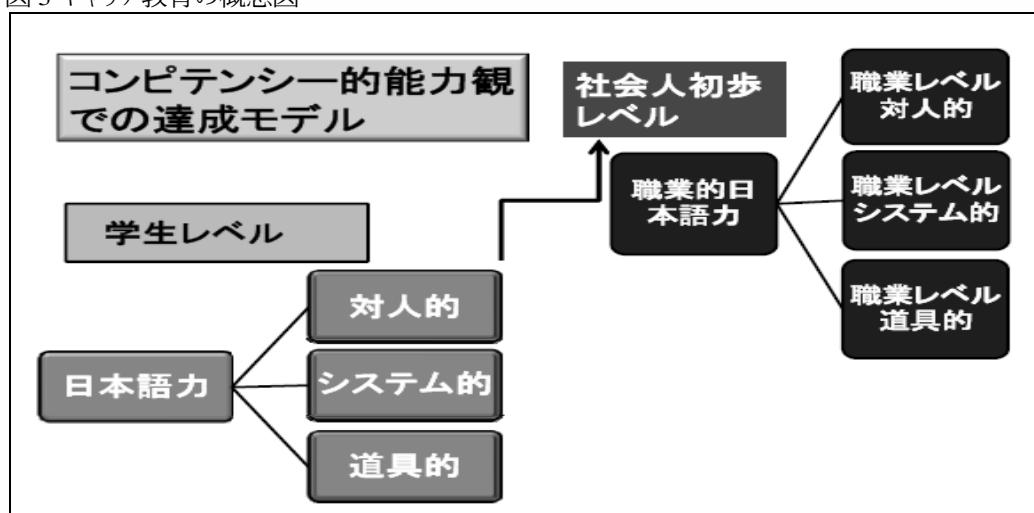
(3)必修の適切性:質問11～15は、必修の適切さを尋ねた。科目の廃止には96.4%が、また選択科目化には74.6%が反対している。逆に、必修を維持して淡江大学の特徴にする87.6%、後輩に推薦する94.7%、社会に自慢する93%などと90%前後の多くの卒業生がこの科目を自分の出身校の特色ある科目として高く評価している。よって、今までの実施成果において「卒業制作及び指導」は必修科目として継続したほうがよいという評価を受けていると言える。

以上から、多くの卒業生が在学中の「卒業制作及び指導」科目での1年間の制作過程および指導教員とのコミュニケーションを通じて、障害の克服と就業スキル習得という形で制作の成果を捉え、また、その試練を乗り越えて制作を完成させたことに大きな満足を覚えた様子が、今回の調査から窺えた。同時に、就業の過程で「卒業制作及び指導」科目の制作内容がその後の進路選択上、大変プラスになったことを自覚した様子も推測できた。

7.結論

本論文では、コンピテンシーの概念をキャリア意識形成による日本語教育の理論として応用し、台湾淡江大学の「卒業制作及び指導」授業を实践例にして、こうしたカリキュラムが、卒業に備えての学生のキャリア意識形成による日本語技能向上、職業スキル実習を兼ねうることを、在学生及び卒業生の両方の意識調査から客観的に検証してきた。

図3 キャリア教育の概念図



結果を以下のように纏めることが出来る。在学生も卒業生も、障害の克服という形で1年間の制作過程を捉え、完成した制作自体は不十分だとは知りながら、心理的障礙、能力的壁を乗り越えたことに大きな満足を感じているという点では、両者は共通している。また、制作過程で自分に欠けているスキルや能力を具体的に自覚していったということも両者に共通して言える。両者とも、「卒業制作及び指導」を学科の自慢すべき特色として、また必修科目として残すべきだと強く要望を出している。

さらに、就学、就業に拘わらず、「卒業制作及び指導」科目の制作内容が自分の進路選択上、大変プラスになったことや、「卒業制作及び指導」で学んだスキル・能力・思考が仕事に応用できたことが今回の調査から窺える。

在学生、卒業生の両方から高い評価を得た「卒業制作及び指導」は、この14年間の実施で、ある程度指導内容をマニュアル化できるようになりつつある。しかし、各学年の素質、性格は教員が驚くほどそれぞれ違っているため、各学年の4年生の学習状況を注意深く観察しながら、

最も適切な時点で具体的目標を示したり、アドバイスや叱咤激励したりすることも大事である。それで、受講生に対して上学期と下学科に1回ずつ行ったアンケート調査の分析から、4年生の学習状況を的確に把握することを急ぐべきという課題も認識される。このように、通時的視点だけではなく、共時的観点も合わせて、「卒業制作及び指導」の方向性や内容重点を総合的に検討することを今後の課題としたい。

他方、連続的に在学生に対してアンケート調査を実施することも効果的なカリキュラムデザインには必要である。そこから、日本語学科の卒業生の進路を見極めることが出来るだけでなく、毎年の4年生が進路を決める際に、進路を左右する変動因子とされた社会的経済的状況を考慮に入れて、4年生の「卒業制作及び指導」に臨むことが出来るからである。

今回の調査を通じて、コンピテンシーの概念から見ると、学生達の能力は、以上の図3のように、「卒業制作及び指導」でのスキルの習得や課題達成を通じて社会人的能力の下地を作っていたと考えられる。ここからは、大学で自己完結的にすべての知識やスキルを教えて完全な能力を在校生に身につけさせて卒業させるという従来の知能型の能力観ではなく、むしろ卒業後に社会で学び得るさまざまなスキルの下地を大学教育で作るという能力観を持つ必要性を示していると言える。今のカリキュラムの枠内で出来るキャリア意識形成指導として、「卒業制作及び指導」とその教育学的検討を今後も継続して活かしていきたい。

(TSENG CHIU KUEI 淡江大学日本語文学系)

付記

本論文は2012年8月1日にカナダ・バンフで開かれた「CAJLE 2012 Tentative Conference」で口頭発表した内容に加筆訂正を加えたものである。

参考文献

- 谷内篤博(2001)「新しい能力主義としてのコンピテンシー・モデルの妥当性と信頼性」『経営論集』11(1)P49-62
- 古川久敬監修 JMAM コンピテンシー研究会編著 (2002 初・2008)『コンピテンシーラーニング』日本能率協会ネマジメントセンター
- 東清和・安達智子編著(2003)『大学生の職業意識の発達—最近の調査データの分析から』学文社
- 渡辺寿美子・永井裕子・河合忠彦・田代美智子(2004)「高業績グローバルマネジャーのコンピテンシー活用に関する国際比較研究」『国際ビジネス研究学会年報』10P201-215

- 高木史朗(2004)『日本コンピテンシー評価と能力開発』日本コンサルタントグループ
- 渡辺孝雄(2005)「福祉産業におけるコンピテンシーに基づく人材重視の経営」『第一福祉大学紀要』2P175-184
- 井村直恵(2005)「日本におけるコンピテンシー:モデリングと運用」『京都マネジメント・レビュー』7P93-106
- 吉本圭一(2005)「英国における大卒者の初期キャリア管理とコンピテンシー」『行動教育と人材育成の日英比較—企業インタビューからみる採用・育成と大学教育の関係』労働制作報告書 NO.38
- ドミニク・S・ライチェン/ローラ・H・サルガニク編著立出慶裕監訳/今西幸慶代表訳 (2006 初・2008)『キー・コンピテンシー』明石書店
- 大野勝利(2006)「コンピテンシーの定義に関する一考察」『大阪府立大学経済研究』52(1)P99-112
- 都筑学(2007)『大学生の進路選択と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討』ナカニシヤ出版
- 小杉礼子編著(2007)『大学生の就職とキャリア—普通の就活・個別の支援』勁草書房
- 原田信之(2007)「事実教授カリキュラムとコンピテンシーの育成—諸州共同版学習指導要領(2004)の検討—」『岐阜大学教育学部研究報告人文学科』56(1)P181-191
- 岩脇千裕(2007)「日本企業の大学新卒者採用におけるコンピテンシー概念の文脈—自己理解支援ツール開発にむけの探索的アプローチ」『JILPT Discussion Paper Series』07-04
- 栗田充治(2008)「『教養教育』とキー・コンピテンシー(<特集>:教養教育を考える)」『亜細亜大学学術文化紀要』12/13P81-97
- 岩脇千裕(2009)『大学新卒者採用において重視する行動特色(コンピテンシー)に関する調査—企業とアリング調査結果報告—』JILPT 調査シリーズ NO.56
- 松下佳代(2011)「新しい能力における教育の変容—DeSeCo キー・コンピテンシーと PISA リテラシーの検討」『日本労働研究雑誌』614P39-49